

●12/1（日）劇団からっかぜ『切り子たちの秋』（Uホール）

第一印象は、舞台美術の素晴らしさ。

昨年の『もやしの唄』に引き続き、劇団からっかぜの観劇は2回目であったが、パンフレット後半にあった舞台美術の歴史を見ると、それは最近のものだけでなく、昔から受け継がれた特徴であることが分かった。

物語の舞台は、1974年の田舎の町工場。

現代の都会にはほとんど存在しない「ご近所付き合い」が当たり前存在し、人と人との繋がりが、暑苦しいが温かい。脚本作りや役作りが丁寧で、町工場の実情や親子関係などが特にリアルであった。役者の皆さんの自然な演技のおかげもあり、本当にこういう町工場が、どこかにあったのかもしれない、とさえ思わせるものであった。

ベースは会話劇ではあるものの、自然なテンポで、明るいシーンも暗いシーンもあることで、130分もの長さがあったようには感じなかった。特に、花嫁姿の直子とスーツ姿の満男の撮影会のシーンでは会場が温かい笑いに包まれ、物語の終盤は感動で涙が出そうだった。

結局、結婚でハッピーエンド？とも思ったが、よく思い返すと、伸吉は「一緒に立て直そう」と言うだけで、結婚しようとは言っていなかった。観客の良いように想像できる、良い結末だと思った。時代的に、独身を貫くというのは難しいかもしれない。ただ、朝の連続テレビ小説『虎に翼』の主人公の寅子も、「結婚＝幸せ」という価値観に疑問を持っており、夫と死別した後は再婚せず、今でいう事実婚の状態パートナーや家族と過ごしていた。『切り子たちの秋』の幸子の「今のままでも十分幸せだよ」というセリフは、寅子の価値観と少し似たものがあると感じた。

現代でも、孫がいるような世代の方々は、男女が一緒になるのが幸せで、女は家庭を持つのが幸せで、子どもがたくさんいるのが幸せと考えている人が多いイメージだが、「幸せ」というのは、時代によって、その人の価値観・趣味によって変動するものなのだと思う。

時代は違っても、不況や機械化については現代に通じるものがあつたが、正直私自身はその影響を大きくは感じていない。ただ、コロナ禍のことを思い出すと、「時代に逆らえない窮屈さ」のようなものは理解できた。多くの方は、時代に流されるしかないと思っているかもしれないが、この物語における幸子は、時代に立ち向かおうとしていた。周りに無謀だと思われても、希望を持ち、自分の芯を貫く幸子は強いと思った。

この物語の全体を通して感じたのは、「変わらないということの難しさ」である。

自分を変わらなくても、周りの人が変わったり、環境が変わったり、時代が変わったり、

資金状況が変わったり、様々なことが変わることが多いなか、それでも変わらず何かを継続することは難しい。身近には、何十年も続いているイベント、会社、製品などが存在しているが、それを当たり前だと思わず、尊敬・感謝をして過ごそうと思う。それこそ、劇団からつかぜさんは70周年ということで、舞台美術、温かい空気感、丁寧な役作り・演出は、何十年も前から受け継がれてきたものなのであろう。それを踏まえても、この物語は、劇団からつかぜ70周年の作品にふさわしいものであると感じた。